

信越 ビジネス最前線

IT（情報技術）企業のアイビーシステム（新潟市）が、独自の省力化ソフト開発で存在感を發揮している。従業員は40人超と小規模ながら、大手にはない機動力を武器に、斎場やホテルなどIT導入が遅れる現場で他社に先駆け技術提案に強みを持つ。人手不足が深刻な地方の現場の声から生まれるユニークなシステムは新潟県外からも注目を集めつつある。

1月、新潟の産学官が連携した花安斎田斎場（新潟市）での「キャッシュレス葬儀」実験。電子商取引（EC）サイトで香典や供物を事前にクレジットカード決済し、当日はQRコードで記帳するものだ。

斎場・ホテル…「隙間」にIT

アイビーシステム

（新潟市）



ホテルで客・従業員を区別し混雑状況を予測するAIシステムを開発している

伝統的な葬儀でIT化が盲点だった葬儀分野にいち早く目をつけた。「システムを共同化したい」「法律上の問題はない」「実験後、県内だけでなく首都圏などの企業や行政機関からも問い合わせが相次いだ。

先駆的なアイデアは企業との対話で生まれた。キャッシュレス化で見込むのは参列者の利便性向上だけではない。請求書処理など外から見えづらいう經理の事務負担を減らす狙いもある。「葬儀そのものより裏方の業務量の削減が課題」（花安斎田斎場の渡辺安之常務）との現場の声から生

またシステムだ。顧客管理システムなど新潟県内の9割以上の葬儀会社、県外を含め150社超との取引がある。斎場が現実的に抱えている課題を把握しやすいとの強みがあった。

斎場以外にも、近年は多様な現場での支援システムを相次いで開発する。例えばホテルで混雑状況を予測する人工知能（AI）や自治体向けの海岸保安林の「下草刈りロボット」。他に建設作業員の心拍や体温をヘルメット内のセンサーで測り、通信機器で熱中症などを遠隔監視、予防する

柔軟な発想 現場に応える

システムもある。一見地味だが他社がまだ気づいていない分野で課題を解決。若桑茂社長は「大企業ではできない隙間を開拓しないと生きていけない」と語る。

創業は1995年。斎場や娯楽施設の管理システム構築などを手掛けてきたが、近年のAIやあらゆるモノがネットにつながるIoTなどIT技術の進展、地方の人手不足と省力化ニーズを受け事業を多角化。「大手よりエンジニア一人ひとりの独創性は生きる。そのぶん自力で考えられない社員は長続きしない」（若桑氏）と明言。小回りを生かした迅速さや発想の柔軟さが強みだ。

足元では新型コロナウィルスの影響で企業のシステム関連投資が減少する懸念もある。地域に根付き、現場の声に応える独自サービスをいかに築くか。同社だけでなく、地方のIT企業全体の大きな課題でもある。

（松添亮甫）
〓おわり